

茜色の歌姫



第六部 壬申の乱



壬申の乱（想像模型）

是^{すめらみこと}天皇、高市皇子に謂^{かた}りて曰^{のたま}はく、「其^それ近江朝には、左右大臣、及び智謀^{かしこ}き群臣、共に 議^{はかりごと}を定^なむ。今朕^{われ}、與^{とも}に事を計^{はか}る者無し。唯^い幼^{いとけなくわ}か、少^こき孺子^{こども}有^あるのみなり。奈^{いか}之何^{かに}かせむ」とのたまふ。皇子、（中略）奏言^もさく、「近江の群臣、多^{おほ}なりと雖^{いふ}も、何ぞ敢^あえて天皇の靈^{みか}に逆^{さか}はむや。天皇独^{ひと}りのみましますと雖^{いふ}も、臣高市、神^{あまつかみ}、祇^{あまつかみ}の靈^{たま}に頼^より、天皇の命^{いのち}を請^まげて、諸

將を引率て征討たむ」(中略) 天皇誉めて、手を携り背を撫でて(中略) 鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

(『日本書紀』卷第二十八)

第一章 七枝の劍 672

伊勢。春とはいえ、まだ海から吹き付ける風は冷たい。

砂浜から海に、切り立つ崖が突き出し、麓に標繩が張られ、人の立ち入りを禁じている。険しい崖を登った先は、丈の低い樹木が茂っていた。その樹木を掻き分けると、人が十人ほど立っている。平らな岩場を前にして、洞窟が海に向かって開いていた。

岩場に腰を下ろし、鏡郎女は虚空を見つめていた。いまだ夜は明けず、青暗い空の下で、波が打ち寄せては砕けている。

「はや、起きたか」

洞の裡より声がして、盲いた女が姿を現した。鏡郎女は応えた。

「阿礼よ、波の音の騒がしさが、懐かしい」

稗田阿礼は、すでに五十の半ばを越えた。

崖は今もなお、禁忌の地ではあったが、月に二度、海部の伴部が夜闇に紛れ、干した魚、根菜、米、炭などを届けてくる。大海人皇子が、伊勢から飛鳥に遷つて二年ほどたってから、今日まで二十余年、このことは続いていた。

「かつては、疎ましくも思った」

稗田阿礼は、昨夜洞の前に届けられた籠に手を差し入れ、まさぐりつつ言った。

「されど、もはや吾も老いた。盲いた身に、人しれず食を得るは難い。大海人皇子が、海部に命じたのであるが、おかげで命長らえ、世の移り変わりを、面白く眺めることができた」
蝦……伊勢の海で採れる大ぶりの蝦を探り当て、阿礼は笑みを浮かべた。

「汝はよい折に来た。粥に調えよう」

火をおこし、水を張った甕を置き、まず、米とともに煮立てる。蝦の殻を剥き、甕のなかの米が煮立ったところで蝦の身を入れ、塩を振る。

「できたぞ」

椀に入れて差し出された蝦入りの粥を、稗田阿礼は、前日の夜に訪なってきた鏡郎女の前に置いた。鏡郎女は一礼し、身を屈め、犬のように口を椀にいれ、粥を啜った。その背で、押し寄せる波間から、朝日が貌を覗かせた。

「旦那と……」

木の箸で、粥を口に運びつつ、稗田阿礼は呟いた。

「かように朝餉を二人で楽しんでいた」

「不思議なものよの」

鏡郎女も頷いた。

「汝が浜で拾い養った旦那を、吾が土蜘蛛に鍛えた。この吾もまた、この浜で汝に拾われ、助けられた」

その九年前。

白村江での敗北の責を負われ、両手を切り落とされた鏡郎女は、多くの男に姦されつつ、食を与えられ、諸処を彷徨った。伊勢に至り、この崖の下で倒れた。眼が醒めると、稗田阿礼の洞の裡にいた。傍らで稗田阿礼が、見えぬ眼で薬草を煎じていた。

郎女は三月、その洞で暮らした。身も心も癒された郎女は、やがて稗田阿礼に心を開き、すべてをうち明けた。

「汝は、受けた苦しみを晴らそうとしたのみ」

稗田阿礼はそう言い、訝しげな眼差しを向ける鏡郎女に、こう付け加えた。

「旦那を大海人皇子のもとへ遣ったのは、恨みを雪ごうとしたため」

かつて田村皇子に姦され、そのふぐりを碎いた。田村皇子は報復として阿礼の眼を潰した。孕まされた子を阿礼は独りで産み、海部の長に委ね、独り洞窟に籠もった。

「その恨み苦しみを糧に生きてきた。汝と同じく」

開かぬ眼をこちらに向けつつ、微笑んで言う阿礼に、鏡郎女は涙を零した。

——それから九年。

不意に現れた鏡郎女を、稗田阿礼は「来たか」とのみ言い、洞に招じ入れた。

「近江はいま、如何」

粥椀を膝元に置いて、阿礼は問うた。

この二月。

筑紫に留まっていた唐使・郭務棕と談合していた阿倍比羅夫からの使者が、唐の皇帝からの書を携え、近江に派された。黒檀の筐に収められた唐よりの親書は、こう題されていた。

「大唐皇帝、敬うやまいて、書を倭王に問う」

唐は、未だ「日本」の国号を認めていない。皇帝に朝貢すべき東夷とういの外蕃がいばんと見なしている。書は、新羅しんらを討つために、兵を派すよう、要請ようきんしていた。

「大友皇子、中臣なかのとのみこ金、蘇我果安そがのはたやすらは新羅への派兵を唱えた。倭媛皇やまとひめのおおきさき后は諾せず、蘇我赤兄あかえは兵器つづもののみを唐に送るよう献策した。赤兄の策に決まりそうだ」

「そうなれば……」

稗田阿礼は言った。

「唐使は還り、近江は軍を興すか」

「然り。軍となれば、ふたたび世は乱れる」

「それで……」

微笑みを消し、阿礼は問うた。

「汝は吾に如何せよと？」

ただ、懐かしさ故に訪うたわけでもあるまい。鏡郎女はしばし俯うつむき、口を開いた。

「吾は大海人皇子の勝ちを希のぞむ」

阿礼は黙もだしたまま頷いた。

「汝もそれを希むである？」

阿礼は応えなかった。鏡郎女は続けた。

「民心は大海人皇子にあれど、兵の数では近江に劣る。さらに多くの豪族どもや民を味方につけたい。そのためには……」

鏡郎女は言った。

「七枝の剣が要る」

七枝の剣。

剣の左右の端から、それぞれ三本の刃が枝のごとく生え、大和の大王家の祖おやたる日輪の女神が地上に降り立ち、国を統べるべき者に与えた神剣。

「七枝の剣なれば……」

稗田阿礼は静かに言った。

「九年前であつたか、播磨はりまの畑より出で、葛城皇子に献じられ、今は近江の内裏くらの庫にあると聞いた」

「あれは……」

鏡郎女は貌かおを歪めて応えた。

「吾が百済の鍛かじ人に鑄じさせたもの」

「やはりの……」

軽く微笑み、稗田阿礼は頷いた。鏡郎女は続けた。

「まがいものの剣なれど、民は沸き立ち、三韓出兵を後押しした。真の七枝の剣が大海人皇子のもとにあらば、民心はより、皇子に靡なびく。今は近江に付く豪族どものなかにも、吾等に味方する者も出てこよう」

「何故に……」

阿礼は立ち上がり、空になった二つの椀を重ね、瓶の水ですすいだ。

「七枝の剣の行方を吾に問う？」

「汝は知っているはず」

「何故、吾がそれを知る」

「吾は……」

鏡郎女は語気を強めた。

「かつて、蘇我鞍作は邸の書庫に納められた国史、その写しをすべて読んだ。汝ら稗田の家は、大王家に仕える史として、飯豊大王が大和を開きしより、否、それより百年、二百年も遡る昔、御真木大王がヤマトの地に遷り来たりてより、代々の事どもを書き記し来たった。かつて厨戸皇子と蘇我馬子が、稗田の蔵せる史をもとに国史を編んだ。厨戸皇子の薨ぜられて後、馬子は稗田の書庫をすべて焼き、稗田の人々を誅殺した。都合良く史を改竄し、専有することで、蘇我の威を高めるため」

瞬きもせず、阿礼を見つめつつ、鏡郎女は語った。

「汝は、その稗田の姓を継ぐ者。すなわち、蘇我馬子の誅殺を逃れ、伊勢の地に来たり、五十鈴川のほとりに住まう民どもに崇められる巫女となったかつての稗田の史の裔。なれば、馬子が焼いた稗田の書庫の史の節々を、脳裡に刻んでいるはず」

身じろぎひとつせず、黙したままの稗田阿礼に、鏡郎女は言った。

「吾はかつて、巫那を土蜘蛛として育てたころ、天照の女神のこと等、神代より伝わる様々な物語を、巫那より聞いた。汝が、稗田の家に伝わる物語を、巫那に聞かせていたとすれば、

不思議はない」

鏡郎女は口を噤み、稗田阿礼は氷のように面差しを崩さなかった。

崖下の波音はますます激しく、昇る朝日が、二人の女を黄金色に染めた。

「そもそも……」

稗田阿礼は薄く笑い、口を開いた。

「七枝の剣なるもの、今もなお、この世に在ると、汝は信ずるや？」

鏡郎女の面差しが強張った。阿礼は続けた。

「誰もその行方を知らず、誰もその形を知らず、誰もその形を見たこともない七枝の剣を」

「まさか……」

唇を震わせ、鏡郎女は問うた。

「汝等稗田が……」

稗田阿礼は哄笑した。手を叩き、身を折り、しばし笑いとよみ、やがて立ち上がった。

「然り。七枝の剣は、確かにこの世には在る。汝が見たければ、いつでも見せよう。されど……」
まっすぐに太陽の方に貌を向け、阿礼は続けた。

「見れば、七枝の剣が、天皇の御稜威をいや増す神器などではないことも、汝は知ることになる。それでも見たいか？」

危うい足場をつたい、崖をやや降りたところに、もうひとつ、洞が穿たれていた。人がふたり入れば身じろぎもできぬ狭さ、その奥に、潮風に朽ちかけた木篋が置かれている。

腰をかがめて洞に入った稗田阿礼は、無造作に筐の蓋を開け、背後に膝を突いた鏡郎女に差し出した。

覗き込んで鏡郎女は息を呑んだ。筐のなかに収められていたのは……錆び朽ちた鉄の欠片の数々であった。

「欠片を接ぎ合わせれば、七枝の剣となる」

静かに、笑みを含んで阿礼が言った。

「とはいえ、接いだところで、崇められるべき神剣として掲げるに値いしようかの」

鏡郎女は溜息をつき、眼を背けた。阿礼は筐に蓋をし、再び奥に置いた。

「七枝の剣はかつて、卑弥呼なる女王が筑紫の地に邪馬台なる国を築きし折り、貢じた生口の見返りとして、魏より贈られしもの」

魏は、四百年の昔、唐が魏蜀呉の三国に分かれて覇を争っていた折りの一国。生口とはすなわち奴婢のこと。

「卑弥呼は軍を好み、魏を後ろ盾に諸国を攻め滅ぼし、やがて邪馬台は軍の費えにやせ衰え、御真なる王の代に、東へと向かい飛鳥の地に倭なる国を開いた。されど、その倭も稚建大王の御代に滅び、新たに飯豊大王が大和を建てた。七枝の剣は、大和を建てるに功ありし物部の家に下賜され、長くその庫に蔵されていた」

鏡郎女は、眉根をかすかにあげた。

物部に下賜された七枝の剣……。とすれば、七枝の剣は大和を統べるものの有する神剣ではないということ。

稗田阿礼は続けた。

「炊屋大王の御代、蘇我馬子と物部守屋が争って軍を興し、物部が敗れし後、剣は蘇我の庫へと移った」

「即ち……」

鏡郎女が口を開いた。

「蘇我馬子が国史を編み、汝等稗田を滅ぼさんとした折り、生き残りし稗田の者が蘇我の庫より盗み去ったが、その剣」

「然り」

頷く阿礼に、郎女はさらに言った。

「して汝等は、七枝の剣を持つ者こそ、まことに大和を統べる者との流言を放った。真を知る炊屋大王や蘇我馬子が世に在る裡はともかく、やがて流言はいつしか真実めかして伝えられ、吉備から大和に至って大王の御位を奪った田村大王の御代には、いよいよ七枝の剣こそ大王の証と定まった。即ち、七枝の剣を持たぬ大王の御稜威は揺らぎ、争いが起こった」

稗田阿礼は黙して微笑むのみであった。鏡郎女は続けた。

「かくして、大王家は滅び、大和は百済人の統べるところとなった。汝等が希みしままに……」
なにやら……、鏡郎女は苦々しげに唇を歪めた。

「吾もまた、汝の希みしまま、汝の策のままに、徒に血を流し、己が軀さえ毀たれた一人」

「その果てに……」

阿礼は振り向いて郎女に貌を向け、しばし黙した後、口を開いた。

「やがて吾が生みし子が、大和を統べる。そこまで希んでいたわけではない」
足許の苔を指で弄びつつ、稗田阿礼は続けた。

「たとえ何者が国を統べようと、希むままの世を作るなどできるはずもない。統べる者、統べられる無数の民、すべては限られた生を足掻き藻掻くより他なし。たとえ吾が子が国を統べ、しばし世は穏やかに鎮まろうとも、その穏やかさの裡に乱は芽生え、やがて争いとなり、血が流れる」

「史人は……」

鏡郎女は遮った。

「ただ記する。記された史を如何解こうと、知ったことではない、されど……」

遠くに広がる海に向けた眼差しが潤んでいた。

「大海人皇子、あるいは讚良皇女。軍に勝ちし後、彼等が編む史に吾が名は記されまい。名は記されずとも、吾が希みし世が現れればそれでよし、されど汝は、希むままの世など何者にも作れぬと言う。されば吾が生は……」

言葉を失って俯く鏡郎女に、稗田阿礼はそっと寄り添い、肩を抱いた。

春が過ぎ、六月となった。

王都が近江に遷つてより、諸々の道に三十里(約16キロメートル)ごとに駅家が設けられ、常に数頭の馬が置かれていた。すなわち、諸処よりの急使を速やかに近江へ伝えるためである。

筑紫より船が仕立てられ、周防の駅家に届けられた書が、馬によって運ばれ、近江へと至った。

騎馬の官人は、樹々が青々と萌える山を背に、あるいはまぶしく太陽に照らされた川面を眺めつつ、馬蹄を轟かせた。

筑紫に在りて阿部比羅夫と談合していた唐使、郭務儂の一行が、瀬戸の海を経て難波に至り、やがて近江の内裏に参るとの報せであった。

報せはやがて、吉野の大海人皇子のもとへと届けられた。

唐使の一行は、阿部比羅夫の軍船五十に守られ、難波に着く……。

「比羅夫の軍船が？」

大海人皇子をはじめ、舎人どもの面差しが揺れた。かつて白村江で戦った比羅夫の水軍こそ、日本でもっとも強力な軍衆であった。

「大友皇子の策であろうか？」

やがて難波の津は、阿倍の水軍に覆い尽くされよう。難波から飛鳥へは、水路をゆけば半日。飛鳥から吉野までは一日足らず。即ち比羅夫の水軍は、大海人皇子の喉元に突きつけられた刃に等しい。

「然り」

大海人皇子は頷いた。

「即ち、唐使郭務儂が近江に至りし時、変事が起こる」

「その変事とは？」

舎人どもの問いに、大海人皇子は首を振り、近江にある置始比等の報せを待とう、とのみ言った。